

新英語教育

THE NEW ENGLISH CLASSROOM

1

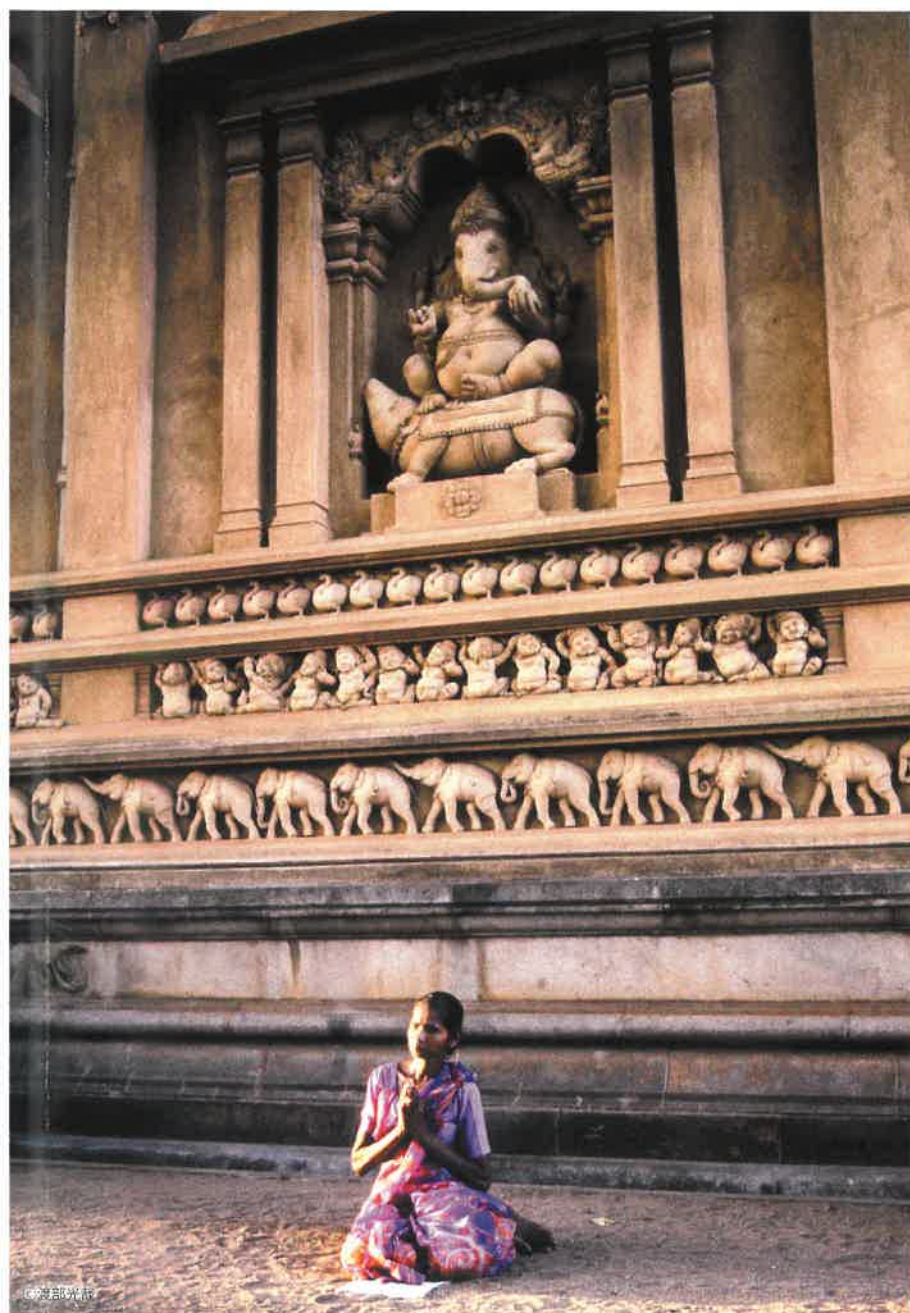
2019

2019年1月1日
(毎月1回1日発行)

第593号

【特集】

英語でつながる世界の子どもたち



実践高校

文化を紹介し合う活動を通して
多様性の素晴らしさを学ぶ

実践高校

アートマイルプロジェクトの
取り組み
異文化理解講座での海外校との
協働学習

実践中学

3年間で行ったピースメッセ
ンジャーの取り組み

実践小学校

Holiday Card Exchange には
wonder がいっぱい
～読み聞かせから海外交流、そして
話しかけ体験まで～

実践中学

テディーベア・プロジェクト

【連載】

- 新英研 第 55 回全国大会
愛知大会 現地だより
AI 時代に求められる
外国語 (英語) 教育は何か、
に答える大会を！
弘山 貞夫
- 2018 年度新英研冬のブロック集会

We are the world,
we are the children....
by USA for Africa



新英語教育研究会編集／高文研

● 実践高校

アートマイルプロジェクトの取り組み

異文化理解講座での海外校との協働学習

杉山 讓司 (すぎやま・じょうじ 北海道・市立札幌大通高校)



はじめに

本実践は異文化理解の講座のなかで2012年度から取り組んでいるプロジェクトである。市立札幌大通高校(以下、大通高校)は単位制高校であり、普通科のほぼすべての科目と多くの学校設定科目に加えて、いくつかの教科の専門科目が開講されている。英語科の専門科目である異文化理解は、すべての部(午前、午後、夜間)で1講座(2単位、2校時続き90分で週1回実施)ずつ開講されている。受講人数は1講座に7、8名から20名程度と年度によりまちまちであるが、ほとんどの生徒は、この科目の目標、内容をよく理解して選択しているといえる。

異文化理解講座でのアートマイルプロジェクトの位置づけ、この7年間のパートナー校と協働学習テーマ、プロジェクトの流れ、そしてその学びの成

果について以下に述べる。

異文化理解講座と アートマイルプロジェクト

アートマイルプロジェクト(正式名称、アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクト)は「海外のパートナー校とインターネットを使って『平和』や『環境』など世界共通のテーマについて学び合い、世界に訴えるメッセージを込めて一枚の壁画(1.5m×3.6m)を半分ずつ描いて共創する国際協働学習」である(運営母体ジャパンアートマイル=以下、JAM=のHPより)。2006年から始まり、ここ数年では毎年、世界の20～30の国・地域の学校との交流で100校以上の学校の、多いときで5,000名以上の児童生徒が参加している。

大通高校の異文化理解はその大きな目標を「他者のものの見方を知ることで、自分のものの見方を批判的に見つめ直す」とし、ステレオタイプと偏見・差別、憲法9条・世界人権宣言、SDGs・児童労働・フェアトレードなどをテーマにした学習や多文化共生シミュレーション活動をしている。

2012年1月の北海道新英研主催の全道外国語教育研究集会の講演「ESDは英語教育の転換をもたらすか」で浅川和也氏に紹介いただいた地球規模の

年度	国	学校名	協働学習テーマ
2012	マレーシア	Monfort Youth Center	Cultural Introduction: People, Places and Events
2013	メキシコ	Prepa Tec – Campus Santa Catarina	Traditional Holidays / National Events
2014	タイ	Plearnpasa Language School	Understanding Stereotypes
2015	フィリピン	Philippine Normal University - Institute of Teaching and Learning	Festivals – Festivities : A Mirror of Our Cultures with an Awareness of ESD
2016	タイ	Suksasongkro Chiang Mai School	Cultural Differences and Similarities
2017	エジプト	Al-Shaheed Ibrahim Al-Refaey Governmental Distinguished Language School	Images of Peace
2018	アメリカ	Scales Mound Junior High School	SDGs

表1

プロジェクトの中にアートマイルプロジェクトがあり、その意義が異文化理解講座の目標と合致すること、実際の交流によりその目標に一層近づくことができるという思いで、新年度から参加することとした。

これまでのパートナー校と協働学習テーマ

表1はこれまでの交流した国・学校名と協働学習のテーマ(=壁画のタイトル)である。パートナー校はJAMが日本側の希望(国・地域)を確認しマッチングしてくれる。校種は中等教育の学校以外にも職業訓練校のような各種学校(2012年度のマレーシア)も含まれる。

大通高校では希望を伝える際に、英語圏以外の国・地域の学校をお願いしている。それは交流の際に使う言語はどうしても英語とならざるをえないが、どちらも外国語として学んでいるという対等な立場が、交流の障壁を低めることにつながるだろうと考えるからである。

ほかの国・地域の学校との交流ということで、彼我の文化の違いに着目するところから学習が始まるのは当然のことであり、それが協働学習のテーマになることが多い。そしてそのテーマを壁画に落とし込むときには、どうしても描きやすい祭事・催事がモチーフとなる。ただその紹介に終わらずに興味深い学習につなげられた例もある。例えばメキシコの学校との交流では、よく似た祭や祝日を出し合い、深く調べるとその日に込められた意味や祝い方が違うこと、それが国民性の違いにも関係するのではないかという推察につながった(Day of the Deadとお盆など)。

理想は異文化理解の講座の中で学習したことをテーマにすることである。2014年度には、4月当初時間をかけて学習したステレオタイプをテーマにすることができた。タイの学校では山岳少数民族の学校への訪問、聞き取りなど調査を行っており、差別、平等、人権などというキーワードが交流の場を行き来した。フィリピンの学校(2015年度)はESDを積極的に取り入れている学校であり、お互いの伝統的な祭事を持続発展性の視点から捉えなおす学習に発展した。

2014年度は日本(岡山)で行われたユネスコ世界大会の場で、タイと大通高校の生徒がスカイプ会議を生中継で行うという大きなイベントがあった。2015年はともにユネスコスクールということもあり、私たち3人の担当教員がマニラにあるパートナー校を訪問する好機に恵まれた。そのような画期的な出来事、担当者同士の意思疎通の深まりも、理想とする協働学習の牽引となったかもしれない。

プロジェクトの実際

5月にプロジェクト参加のエントリーを行い、パートナー校が決まり、担当者(教員)同士でテーマ、スケジュールのすり合わせを行い、いよいよプロジェクトが始まる。表2は実際に授業の中で取り組みが始まってからの月ごとの活動内容と割り当てている授業回数である(「授業回数」は1回=90分)。

自己・自文化紹介をお互いにビデオレターなどで行い、テーマ学習で学んだことをスライドなどで作成し共有する。その際のツールは主にJAMが用意してくれているインターネット上のフォーラム(下図)である。

またスカイプを利用してお互いの顔を見ながらの会議も、時差、通信環境の問題がクリアされれば取り入れている。日程を調整し、その時期に合わせて協働の学びの成果、壁画の構図の話し合いを行っている。



こちらとパートナー校、お互いの授業進度などで協働学習が計画通り進まないこともあるが、毎年12

月	内容	授業回数
7	イントロダクション・相手国調べ	1
8~9	自己紹介・自文化紹介	2
9	相手国学習 (JICA 出前講座)	1
10~11	テーマについて協働学習	3
11	構図の協議, 壁画原画作成	2
12	壁画絵塗りに (日本側)	2
1~2	補助活動 (雪祭り紹介など) 〈海外側・壁画絵塗りに〉	1 (2)
3	完成壁画鑑賞・振り返り, 校内報告	2

表2

月には絵塗りに入ることができている。午前、午後、夜間と文字通り筆をリレーしながら描き上げていく。12月下旬にこちら側が半分描いた壁画を送り、2月中に残り半分をパートナー校が描いた完成品がこちらに届く。見事に融和した1枚の作品となった壁画が戻ってきたときの感動は何ものにも代えがたいようである。3月のプレゼンテーション大会で壁画を全校生徒に見てもらいながら、プロジェクトでの学びを報告する。



実は2017年度初めて、壁画がパートナー校の手が届かないということが起きた。エジプトの税関と一緒に送る絵の具の成分に関わって荷物が留め置きになり、例年3月には完成して戻ってきた壁画を全校にお披露目するのだが、それが叶わなかった。その報告に際しての代表生徒のことはが奇しくも異文化理解「力」の成長を示すものとなった。

「完成した壁画をお見せできないのは残念ではありますが、異なる文化の人たちと交流するときに自分たちの常識では物事は進まないのだというを理解する、大きな学びとなりました」

生徒の声に見る学びの成果

このプロジェクトで育つ力として、異文化理解、自文化理解、コミュニケーション力、主体的に学ぶ意欲、情報活用能力などが期待されている。完成した壁画を前に書いてくれた生徒の振り返りの文章にそれを読み取ることができる。外国語である英語に「心をのせる」ことの大事さへの気づきも語っている。少し長くなるが、最後に引用する。

「この活動を通して一番強く感じたことは、『伝えようとする心』が大切ということです。言語も文化も違う国の人とこんなに深く関わるのは初めての経験で、それが『一つのことを創りあげる』ということで、最初は『え、そんなことできるの?』と正直、思いました。でもこのプロジェクトは長い時間をかけてステップをふんでいくもので、自分でも気づかないうちに『もっと伝えたい』『もっと知りたい』『もっと教えてほしい、話したい』と入り込んでいきました。今完成した壁画を目にし、本当に感動で胸いっぱいです。

最初に書いた『伝えようとする心』が大切だと感じたのは、お互いに勉強をしている英語を使って、文化も違う中で『この文章正しいのかな?』『この表現は失礼じゃないかな?』と悩んでいては前に進めない。だから、まずは自分なりの言葉で表現してみよう、と思ったことがきっかけでした。そして発信してみると、いろいろな答えが返ってきました。私は英語はまだただけど、こちらが伝えたいと願えばそれが相手に伝わり、それに応えようとしてくれました。だから、そんな『心』が一番大切なんだろうなと感じました。そして、こう感じたことが自分の成長ではないかと思います」



2015年度交流のフィリピンの先生と生徒たち